総合教育センター
学生向け情報誌
クレードル
28 号

CRADLE

Center for Research And Development of
Liberal arts Education
28th issue

全学教育推進機構　総合教育センターの仲間です

疑問が道をひらく
―どのようにして研究と出会ったか―
p.2　大畑　真也（総合教育センター）

自己紹介させていただきます
p.3　金山　佐喜子（総合教育センター）

ついに「森」から飛び出した！

「森に生きる」
「ローカリーアクト天理 SDGｓ森に生きる」報告
p.4　佐竹　靖（近畿大学　教職教育部）
p.7　竹村　景生（総合教育センター）

できるかなぁ

心の健康法 23

よい言葉をかけあいましょう
p.12　仲　淳（総合教育センター）

疑問が道をひらく

―どのようにして研究と出会ったか―

総合教育センター　大畑　真也

本年４月に本学人文学部総合教育センターに着任しました、大畑真也と申します。これまでに、静岡県立高校と富山県の高等専門学校（高専）で勤務してきました。本学では、教育面は、必修英語科目やアカデミック英語科目群の一部、そして基礎ゼミナールを担当しています。他方で研究面は、第二言語習得研究を専門としています。第二言語習得研究は、母語（生まれて最初に習得する言語）は簡単に獲得することができる一方で、第二言語（母語の次に習得する言語）となると、なぜそうはいかないのかといった疑問を解明する学問です。例えば、日本語母語話者の多くは日本語を自由に操ることができるかと思いますが、第二言語である英語となるとうまくいかないために苦労することが多いかと思います。ここでは、なぜ私が第二言語習得を研究したいと思うようになったのかを簡単に述べて自己紹介とさせていただきたいと思います。

これまでの勤務校でも本学でも、授業では英語科目を担当していますが、これまでに一貫して英語が得意だったというわけではありません。中学生時代は、教科書を音読することや本文を書きとることが好きであったため、英語は得意科目で漠然と将来は英語を使う仕事につくのもよいなと考えていました。しかし高校入学後、得意だったはずの英語の成績は急激に下降します。おそらく、他の科目の勉強に時間を取られ、英語の学習時間が減ったことや、授業中に寝ていたことなど、成績低下の原因はさまざまだったと思います。さらに、成績が下がったことや、中学校と高校の授業スタイルの違いになじめなかったことから、いつの間にか英語に対して苦手意識を抱くようにもなりました。

しかし、高校 3 年生となり受験勉強をしなければいけないなかで、怠け者の私は、どうにかして努力せず簡単に英語ができるようになる方法はないものかと模索しました。また、高校時代は学校の先生に対して全く素直になれなかった私は、もっと英語力がつく教え方があるのではないかという疑問や、効果的な指導法があるのではないかといった疑問も抱くようになり、放課後は受験勉強をせずに、自分の興味のある本ばかりを探して読むことに没頭していました。そうした中、書店の新書コーナーで、「第二言語習得研究」という研究分野をごく簡単に紹介した本に出会いました。まさしく、当時私が抱いていた疑問に取り組んでいる学問分野があることを知り大きな衝撃を受け、大学では必ずこの分野を勉強したい、と思うようになりました。これが、私が現在専門としている研究分野に興味をもった最初のきっかけです。

入った大学では、第二言語習得研究を専門としている先生のゼミに入れてもらい、そこでは実際に自分自身で研究を行うことの面白さを教えてもらいました。そして今でも、大学時代からご指導いただいている先生に日々支えられながら、一人前の研究者・大学教員になれるよう、鋭意努力しているところです。

このように、私の場合は高校時代に抱いた素朴な疑問がきっかけとなって、自分にとってとても面白いと思う研究に出会うことができました。当時は外国語をどう教えるのが効果的

かという教育に関する分野に強く関心がありましたが、大学時代のゼミで学んだ経験などから、むしろ第二言語を習得中の学習者の知識がどうなっているのか、どのように知識が発達していくのかといった第二言語習得のメカニズムに強い興味を抱くようになりました。

ぜひ学生の皆さんにも、身の回りのことに疑問を持ち自分の関心に基づいて調べたり、学び続けたりする姿勢を大切にしてほしいと思います。現代社会では、YouTube や Instagram、TikTok などの SNS 等を通じて膨大な情報が日々流れ込み、つい貴重な時間を費やしてしまいがちです。しかし、他人に流されたり操作されたりするばかりではなく、適切に情報を取捨選択できるようになり、自らが「面白い」と思えることを追求していってほしいと思っています。

自己紹介をさせていただきます

総合教育センター　金山　佐喜子

今年度より、人文学部に着任いたしました金山佐喜子と申します。お近づきのしるしに、少し自己紹介をさせていただきたいと思います。

私は、埼玉県の天理教の教会に生まれました。都会でも田舎でもなく、名所はないけど生活に必要なものはそろっているといった、ありふれた町で、ごくごく普通に育ちました。強いて言えば、家が天理教の教会で、住み込んでいる方たちと寝食を共にし、いろいろな人の人生に触れる機会が多かったことが、学校で出会う友達とは違うところでした。私が経験したことも見たこともない世界で生きてきた人たちと、教会で家族のように生活をするのが常でした。いろいろな人に出会うことは、おもしろい。この経験が、私が対人援助や教育に関心を持った原点ではないかと思います。

大学に入学してすぐの頃、授業で里親制度を知り、その取り組みに関心を持ち、家族で話し合い両親が里親登録をしました。大学生活の思い出といえば、友達と楽しく過ごしたことや理想の教育について熱く語り合ったことに加え、教会で子どもたちと一緒に過ごしたことです。お菓子作りをしたり、公園へ遊びに行ったり、勉強を教えたりしながら、私と出会った子どもたちが皆、幸せになってほしいと願っていました。

天理大学に勤めている今、学生が友達と楽しい時間を過ごしたり、夢に向かって努力したり、時には、悩んだり葛藤したりしながら、皆幸せになってくれたらいいなと思っています。そして、教員養成に携わる者として、生徒の幸せに貢献できる教員の養成に努めたいと思いを新たにしています。

ここでも、たくさんの人と出会えることを楽しみにしています。

「森に生きる」「ローカリーアクト天理 SDGｓ森に生きる」

大国見山実習　５月 17 日

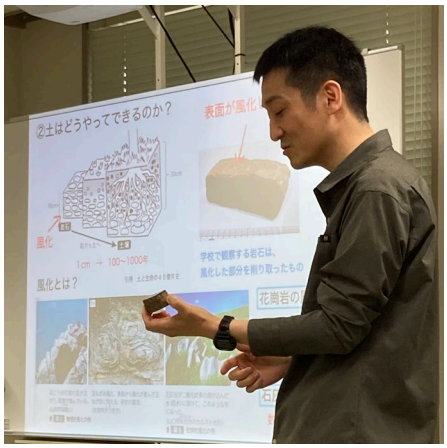
講師　佐竹　靖氏　近畿大学　教職教育部

本庄　眞氏　奈良流水生物研究会

奥吉野自然研究会

近畿大学　佐竹　靖

今回の「森に生きる」は、天候に恵まれず、室内（一部屋外）での活動になった。本来は、大国見山山頂から奈良盆地や山ができた歴史や、ハツ岩で風化について学習する予定であった。また、ルート上には、花崗岩が風化してマサ土ができ、植物が根を下ろしている様子がよく観察できる場所がある。岩石から土へ変化する過程を観察することで、地球と生命がいかに繋がっているか、その現場を目撃しようと考えていた。「森に生きる」のはじめの一歩として、人と自然のつながりを実感してもらうことが、毎回私が意識していることである。



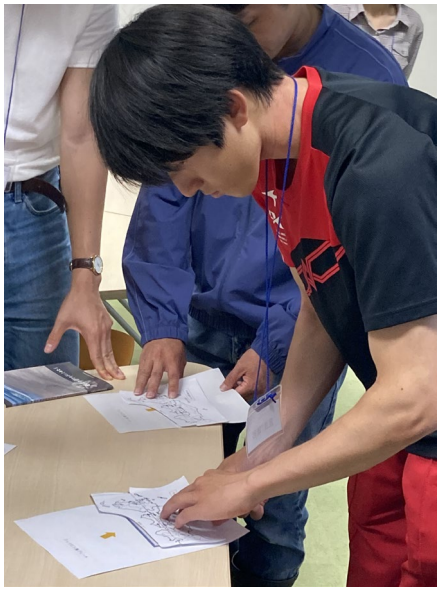
かつて中学校理科教師をしていたとき、「地球は何でできていますか？」と問うと、「土！」と答えた生徒が多くいたことに驚愕したことがある。確かに、学校を一歩出て私たちが目にするのは、花壇や畑、公園の土であり、岩石が主体であるとは実感できない。しかも、コンクリートなどの人工物で覆われた現代では、地球の素顔を見る機会は少なく、生徒の答えはごもっともである。しかし、大地が何でできているかを知る手掛かりは、意外とたくさんある。河原の石、海岸の砂、畑の石垣、墓石、アスファルトに含まれる砂利、土までも、比べてみると地域の地質を反映していることが多い。

そこで今回は、「岩石と土」「岩石と川砂利」「世界の海岸の砂」の観察から大地の変動、プレートの動きまで、様々な角度から大地を観る学修を行った。熱心に観察する学生の様子に感心させられた。さらに屋外かつ学外の安全な場所に足を伸ばし、岩石の風化実験を行った。硬い岩石

が、物理的風化（加熱と冷却を繰り返す）によって、手で崩れてバラバラになる様子に、学生も驚いたようだった。

藤井（2024）※は、「土は人間に作れない」と述べている。一般に、マグマが冷えて花崗岩ができるまで最低でも数十万年かかるとされ、１cm の土が作られるのには 100～1000 年かかるとされる。また、岩石が土になるまでには、様々な微生物の働きも欠かせない。このように、人智を越えた時間と手間暇をかけ、地球を構成する岩石が私たち生命を支えている。これらに気づき、その辺に転がる石や花壇の土、山の岩々や森の土に想いを馳せられるようになってくれると嬉しい。

※藤井一至（2024）「土と生命の 46 億年史　土と進化の謎に迫る」講談社



学生感想

【佐竹さんの講義・実習について】

・地質や岩石の種類及び成り立ちについて学び、プレパラートを使った工作や実際に石を割る実験を経てその性質を深掘りすることができた。

・川や森林も含めて、自然は全てが繋がっている。その事実と自然という存在の大きさを今回の講義で改めて理解する事ができたと感じている。

・先生が世界各地で集めた石や土を見比べて、その土地がどういうようにしてできたのか

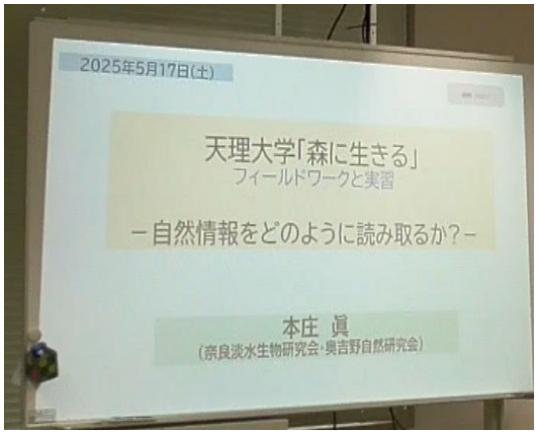
を知ることが出来ました。その際に私がものすごく感動したことは、先生の研究理論と実験の方法です。

【本庄さんの講義・実習について】

・資料を使って見聞を広める事もさることながら、実物を使っての実験、体験もできてとても有意義な時間を過ごすことができたと感じている。採集して来た水生生物の仲間分け作業を行い、その後川における生活史や水の汚れによる水質の違いなどを学習した。その次に奈良県におけるカモシカの生息環境とその変化によってもたらされる影響について学び、多くの野生動物たちの現状を知ることができた。川や森林をはじめとする自然は様々な要素が密接に結びついており、そこに住む生き物や地形を見ればその場所が綺麗か汚いか、古くからあるのか新しくできたのかなどさ多くの情報を読み解ける事、その重要性を改めて理解できた。

・水の「汚れ」と「濁り」の違いについて学びました。正直に言うと、これまでその違いを意識したことがなく、すべて一緒くたに「水が汚い」と捉えていました。

とくに、人間の活動によって生まれる「汚れ」については深く考えさせられました。



伊勢実習６月７日

講師　幸田　高由　氏　秘密基地研究会代表

北野　信久　氏　みえ森づくりサポートセンター長

総合教育センター　竹村　景生

「森に生きる」の活動を、もう少し俯瞰的に捉えることはできないだろうか？そんなことを考えていた。気仙沼のカキ漁師・畠山重篤さん[1]の「森は海の恋人」という言葉は、地球環境問題が私たちの意識に上り始めた1990年代に注目された。今では、教科書にも取り上げられている。

ところで、皆さんにとって川って普段どのように映っているだろうか？河口から川をさかのぼり、探検し、源流域まで辿る旅は、私たちが見慣れてきた日常の景色を一変させる。私たちが見ている地域の川はコンクリート三面張りで単なる下水の水路にすぎず、また暗渠にされて日常からは見えなくされているかもしれない。私たちの感覚としての川は、流され流すものである。

幸田高由さん[2]はダイバー、海の人である。ダイビングを通して川をさかのぼっていって、森の専門家、北野信久さん[3]と出会う。畠山さんの言葉がぴったりとあてはまるような出会いだと思う。海を知りたければ、川をさかのぼり森へ行ってみる。その逆もまた真である。森に生き、川を生き、海を生きる。森から海への流れが育んだ智慧を流域思考ともいう。今回は、流域思考を知るところまでは行けなかったが、まずは現在の河口を体感し、川からの景色を存分に楽しんでもらえたら、まずは入門編としては成功だと言えるだろう。

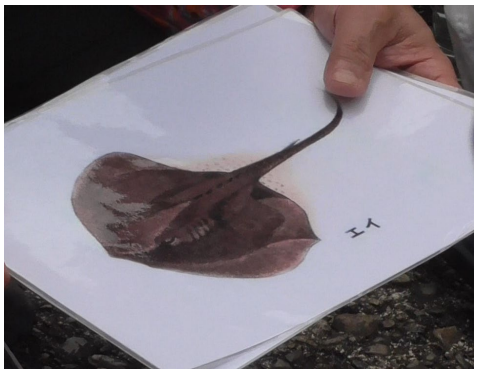
[1]日本の養殖漁業家、エッセイスト、京都大学フィールド科学教育センター社会連携教授（2025 年4 月3 日逝去） https://mori-umi.org/greeting/

[2] 秘密基地研究会代表 実習の指導者

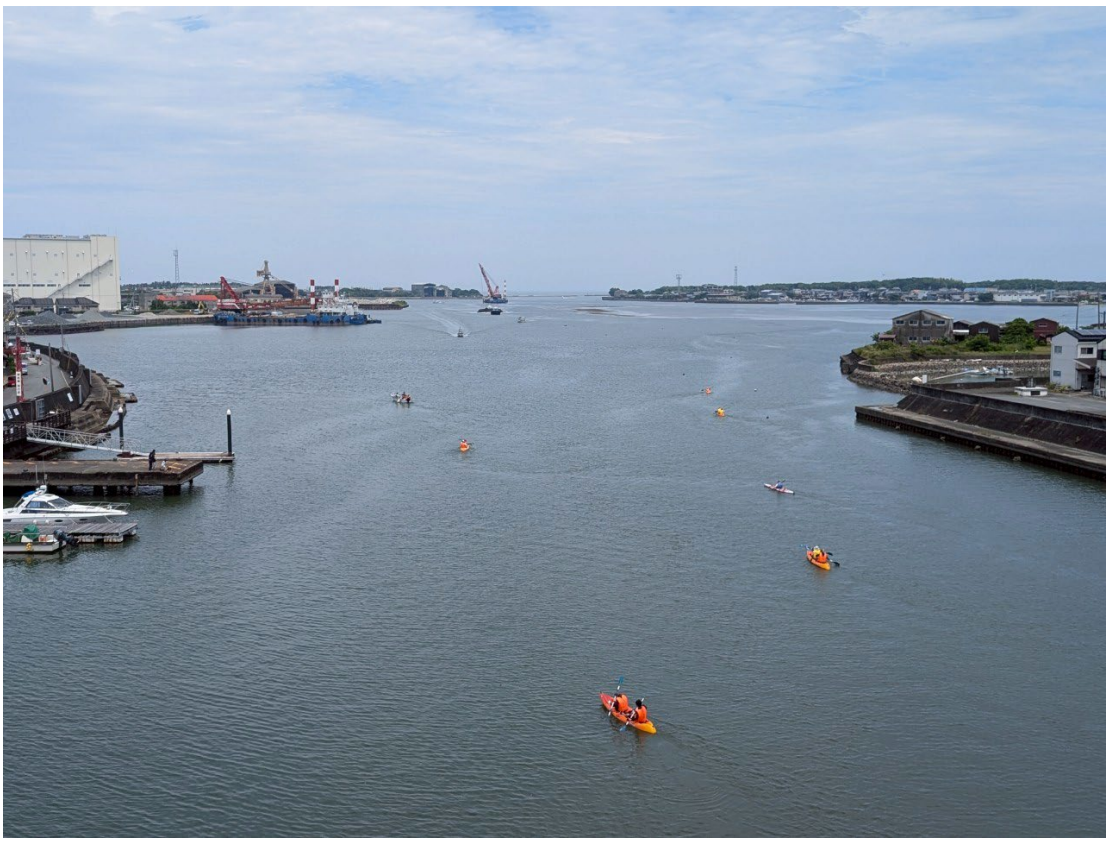
[3]みえ森づくりサポートセンター長 実習の指導者

学生感想

・昨年のカリキュラムには無かったシーカヤック体験ですが、今回は森と海との繋がりの他に地形的な学びや生息する生物、人間の活動が及ぼす影響が強く感じられる体験となりました。



・山と川と海の深い関係への強い興味を持つことが出来ました。前回の 5 月 17 日の講義で山・川・海は繋がっており、お互いに影響し合っていることを学びました。そして、今回カヤックで漕いでいると、たくさんの水の生物と触れ合うことが出来ました。普段できないような体験をできるこの授業で、まだまだある実習や座学でたくさんのことを吸収して、将来に活かして行きます。



・最初はカヌーの操作に慣れず、なかなか思うように前に進めず苦労しましたが、次第にコツをつかむことで安定して漕げるようになり、ペアの人と息を合わせて、楽しむことができました。水域が汽水域だったため、誤って口に入った水が塩気を含んでいて、淡水との違いを実感する機会にもなりました。実際に自然と直接ふれあいながら、流域環境や水質に対する理解を深めることができ、良かったです。

・河口域でありながら上流部に生えていたであろう木の枝が流れていることから森林と河川、海とのつながりを感じました。

WILDERNESS

みなとオアシス伊
海の駅
神 社

心の健康法２３　「よい言葉」をかけあいましょう！

総合教育センター　仲　淳（臨床心理士）

先日、京都でラーメン屋さんに入ったときのことです。カウンター席に着くと、隣に海外からの旅行中と思われる女性が一人で座っていました。そのお店はつけ麺が有名なお店だったので、しばらくして、女性のもとにもザルに盛られた麺と、つけ汁の入ったどんぶりが運ばれてきたのですが、店員さんはあまり英語が得意ではなかったようで、ほとんどなにも説明することなく、去って行ってしまいました。

ノンアルコールビールを飲みながら、超アクロバティックなお箸の持ち方で、ゆっくりつけ麺を食べている女性。つけ汁はだんだん冷めていっているのがわかります。他の人は店員さんが「温め直しできますからね」と言ってくれているのですが、女性は知りません。そこで僕は勇気を出して、“You can make it hot again.”と、合ってるかどうかわからない片言の英語で聞いてみました。すると女性からは、”It’s very cold ,now. Pour?（熱いスープを注ぎ足してくれるの?）”という返事が返ってきたので、“No,no. Hot again.”とまた片言で伝えて、店員さんに温め直しを頼んであげたのでした。

そしてその後、湯気の立つスープを見て、“Very hot!”と喜んでいる女性を横目に、先に席を立って、“Bye-bye! Have a good trip!”と声をかけたところ、パッと彼女から返ってきたのが、美しい発音の **“You , too！(あなたもね！)”** という言葉だったのです。

てっきり、“Thank you!”が返ってくるかと思っていたのですが、女性は、僕のこれから(の人生の旅)がよくなりますように！という、「祈り」の言葉を返してくれたのでした。

たまたま世界の片隅のラーメン屋さんで出会った、もう二度と会うことはないであろう異国の人とのささやかな「一期一会」のやりとりでしたが、僕の心はとても温かくなりました。（スープが温まったように？？）

「言葉」というものは目に見えないですし、手に持つこともできないものですが、相手を想う言葉は、相手の「心」に響いて振るわせます。「よい言葉」をかけあいましょう！

編集後記　2004 年に始まった「森に生きる」。21 年目にして、ついに「海」へ！！「森は海の恋人」・・・。森・川・海は切り離せない存在ってことを、改めて考えさせられた実習でした。今回も講師の幸田さん、北野さんのご指導とサポートのおかげで、無事に終える事ができました。また、現地でサポートしてくださった「みなとまち再生グループ」の皆さんにも心から感謝です。まるで孫を見ているような優しいまなざしが、忘れられないですww（杉）

CRADLE（クレードル）　第 28 号　2025 年 7 月発行
発行者　曽山　典子　天理大学 全学教育推進機構
編集　仲　淳　杉本　めぐみ
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050　電話　0743-63-7092　（内線）6111
印　刷　天理大学　DP センター